

【 特 別 企 画 】

ネクロポリスにおける偶有性とは

アメリカにおける「アルメニア人虐殺」の「承認を求める政治」によせて

藤巻光浩

(文教大学)

このパネルのテーマは、「国際交流とコミュニケーション」であった。「国際交流とコミュニケーション」の関連という、とかくその参加者やグループ間による交流の方法や 이슈の解決方法が主に取り上げられ、「なぜ・どのように」彼ら・彼女らが交流に参加することに至ったのかは、あまり問われない。しかし、「国際交流とコミュニケーション」は、決して自然発生的に生まれるものではなく、「都市」という要素が組み入ることにより、はじめて可能になるものである。都市は、言うまでもなく、国際交流やコミュニケーションのおこる「場」である。したがって、国際交流とコミュニケーションを可能にする見過ごすことのできない大きな文脈である。ここでは、国際交流とかコミュニケーションという言葉、メディアとしての都市を媒介したものととらえ、国際交流のコミュニケーション研究への可能性を追求してみたい。パネルを忠実に再現することは難しいが、エッセンスをそのまま残すことにし、多少の補足を加えることにした。

ここでは、ケーススタディとして、アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館のプランニング段階における、アルメニア人団体による異議申し立てに始まった定義論争を例にとり、「国際交流とコミュニケーション」に「都市」が果たす役割を考えてみたい。この論争は、「都市」の果たす役割を考えるために非常に都合のよいモデルを提示してくれる。このケーススタディをブリーフに紹介することを通じ、都市の国際交流において果たす役割を示し、このテーマをより深く掘り下げてみたい。

1. 記憶の政治とホロコースト定義論争

まず、この博物館であるが、1993年に、アメリカはワシントンDCのモール地区に隣接したブロックに建設された。開館以来、多くの訪問者で賑わい、モール地区の人気博物館の一つとなっている。中学生や高校生の修学旅行の人気スポットにもなっている。また、海外からの訪問者も非常に多く、この博物館の展示する「ホロコースト」という事件への関心の高さをうかがい知ることができる。つまり、ワシントンDCでホロコーストに関する博物館が出来たことで、「ホロコースト」という事件は、アメリカ人のみならず、世界中からも関心を集めることになった。

この博物館は、1978年、カーター大統領命により出来た委員会、ホロコースト・コミッション (President Commission of the Holocaust、以下「コミッション」と略す) が初期段階の推進力となり、1993年の開館にまでこぎつけることができた。ハンガリー系ユダヤ人ホロコースト生存者

エリイ・ヴィーゼル(Elie Wiesel)が、このコミッションの委員長になり、「ホロコースト」被害者の慰霊と教訓を引き出すことを目的とした。もちろん、途中で多くの困難もあったが、ここでみなさんにご紹介する事件は、「ホロコースト」という歴史的な事件の「定義」をめぐって沸き起こった論争である¹⁾。

コミッションは、まず博物館の展示内容を規定することから始めなくてはならなかった。そのために、彼らが展示対象とする「ホロコースト」という言葉を定義することから始めた。その定義を元に、展示内容を決定するのである。結果的に、1978年に彼らが定義した「ホロコースト」は、ユダヤ人だけを被害者にしたものになってしまった。もちろん、コミッションのメンバーがユダヤ人だけに限られていたことや、一般的にホロコーストに対する知識が非常に限られたもので、それはナチスによるユダヤ人迫害という面しか知られていなかったことなどが理由として挙げることができるだろう。この定義によれば、ホロコーストとは、「人類史上初めてのナチスによる600万人のユダヤ人殺害」の²⁾ことだけを示す。この定義は、ユダヤ人のものとして、この事件を領有したかのように見えてしまったために、多くの民族団体が反発した。

この定義に、異議申し立てをした民族団体は、ジプシー、ポーランド人、ウクライナ人、チェコ人などであった。彼らは、「我々もナチスによる攻撃や虐殺の対象であった」と述べた³⁾。しかし、最も判断の難しかった民族団体による異議申し立ては、アルメニア人によるものであった。なぜならば、トルコによるアルメニア人虐殺は第二次世界大戦中のことではなく、第一次世界大戦前のことであったためである。つまり、アルメニア人虐殺は、一般的に考えられている「ホロコースト」の定義範疇に入ることは極めて難しく見えたのである。そのために、アルメニア人団体の異議申し立ては、何度も却下されてしまう。また、それは、妥当な判断としてメディアなどにも報道された。

しかし、もしコミッションが定義したように、「ホロコーストとは、国家によるシステムティックで官僚機構的な虐殺である」という文が正しいならば、トルコ政府によるアルメニア人虐殺は国家によるものであり「システムティックで官僚機構的な虐殺」に当たることにもなる。そうすると、アルメニア人虐殺は、「人類史上初めての虐殺」ということになり、ここで定義された「ホロコースト」からその地位を奪うことになってしまう。しかし、結果的に、ホロコーストの定義の中にアルメニア人虐殺は、「歴史的に属していない」との理由で入らないことになった⁴⁾。

歴史家やジャーナリストらにより、この定義をめぐる一連の出来事は紹介された。この事件の紹介者は、この論争を、ここで私が批評を加えようとする「国際交流」という言葉の持つ意味に近いものとして位置付ける。例えば、P. ゴーレビニッチは、この博物館は、「多文化主義的な多様性を育むプログラムであり、寛容の精神を教えることができる」ために、中高生などの研修に最適であると述べた⁵⁾。また、J. ミラーは、様々な被害者グループが「ホロコースト」定義の中に含まれるようになったことを祝福し、『一つ、そしてまた一つ、また一つ』という著書を書いた⁶⁾。このような意見は、この論争に対する見方としては典型的なものがある。寛容の精神を発揮することで、異なった文化的歴史的背景を持つものが、「ホロコースト」の定義の中に同居することが可能であるという考え方である。しかも、「アメリカによる移民への取り組みの、最終的な勝利である」という意見まで出た⁷⁾。この論争の中では、このような所謂「国際交流」こそが求められているものであり、「ホロコースト」の教訓を引き出すために重要なものとして考えられたのであった。また、これは、それぞれのトラウマを「民族」として成立させる要件とみなすことで民族

主権の確立を図るという意味で、リベラルな記憶観と呼びたい。この論争を、この視点でみることは、このリベラルな記憶方法を採用し過去を思い出すことになる。その結果、現在において、リベラルな記憶観を産出し続けることになる。そして、民族観というものは、決して共有されることのないトラウマを起点に、それぞれの民族によるそれぞれの民族意識というものの想起に留まるのである。これは、トラウマの文化相対主義ということになるであろう。ここでの「国際交流」もまた、文化相対主義的な視点に基くものである。

その一方で、私はこの一連の事件の中で、この文化相対主義を採るのは妥当ではないと思い始めた。なぜなら、定義をめぐる事件の中で結局、被害者ら本人の声は聞こえなくなったように感じたからである。例えば、被害者が自分たちの民族の被った被害を競うのは「醜い」ことであるとコメントした研究者もいた。したがって、被害の度合いや規模を競うような「醜い」ことはやめ、お互いに寛容の精神を発揮すれば、アメリカ社会の目指す多様性（diversity）を達成することができ、この多様性こそがホロコーストのような残忍な事件を防ぐことができる理想であり、これを守るアメリカ社会こそがすばらしい、という見解まで先ほど紹介した通り、出されることになったのである。ここで被害者に強いられたのは、もちろん我慢であり、そして多様性を達成するための寛容さも、被害者によって発揮されることが求められたのである。その結果、被害者の声は、「多様化」という言葉の中に埋没してゆくのである。もし、ホロコーストのような歴史事件の博物館展示の目的が、なんらかの教訓を引き出すことにあるとするならば、この論争の解決方法は、ホロコースト博物館の持つべき目的・趣旨にまったく向いていない。社会がこの事件から得ることができる教訓は、あくまでも生存者や被害者らからのものであって、アメリカ社会からではないからである。もし、教訓をアメリカ社会から引き出すべきものということになれば、生存者にとりホロコースト博物館などを建てることに協力することは全く意味を持たないであろう。

2. 記憶の「秘密」と「灰色の領域」

被害者の声は、圧倒的な力を持っている。「私たち（非被害者）」の注意をグイグイ引き込む力を持つ。ヴィーゼルは、この力の源を「生存者のもつ秘密」にあると言う。「秘密」は秘密であるが故に、その秘密を垣間見ようとする非被害者を引き込む力を持っている。よく分からないものを、もっと知りたいと思い、背伸びをして知ろうとするのは、悪いことではない。しかし、その知りたい思う対象は、いつまでも「秘密」の領域に存在しているのである。これを、ヴィーゼルは、彼独自の言い方で「神秘」であるとか「秘密」などという言葉を使い表現する⁸⁾。彼にとって、この領域は本当の意味で「秘密」であったのか、それとも違ったのかは、ここでは踏み込まない。ここでは、むしろ、この言葉の持つ、コミュニケーション研究にとって重要な、一種の戦略性に注目してみたい。

生存者の持つ「秘密」は、時には敬遠されることがある。例えば、アメリカ大統領であったレーガンは、「（ヴィーゼルの言うような、ホロコーストの持つ）秘密はもうおしまいだ。みんなが分かりやすいものにすべきである」と言った。事件を伝えることが博物館の情報発信機能であるとするならば、「秘密」は障害になる⁹⁾。しかし、すべてを公衆の面前にさらすことに抵抗感のある生存者からしてみれば、「秘密」は保持したいものである。その「秘密」は非常にプライベートなもので、彼ら・彼女らの親兄弟の殺害現場を再び公衆の面前にさらすという「第二の暴力」に

に対する配慮と関係しているかもしれない。また、被害者が、「被害者」のまま博物館に展示されることの暴力に対する配慮を求めてのことかもしれない。展示の中の「被害者」のイメージというのは、なすがまま打ちひしがれてしまう弱者のイメージを増幅させることがある。そこでは弱者はいつまでたっても弱者のままである。それに伴い、加害者は、強者のイメージを博物館展示の中で再生産されることも多い。言い換えるなら、加害者と被害者の関係が常に一定不変のものとして展示されることにより、被害者のトラウマがさらに増幅されてしまう。この懸念も、実際コミッションミーティングでは表明された。このような経緯の中で、生存者を、ただ単に「悲劇」や「試練」を「弱者」として生き残った者としてではなく、「証言者」として積極的に意見を述べる「主体」として位置付ける試みもなされてきた。

また、プリーモ・レーヴィは、「ホロコースト」という歴史事件のコアな部分を「灰色の領域」と名付けた¹⁰⁾。彼にとってラーゲル（絶滅収容所を指す）とは、被害者自身も加害者になるように条件付けられた、悪魔のアパラスに他ならない。このように被害者と加害者の間にある境界線が、常に侵犯される状態にあったことを示し、彼は、ラーゲルの性質を最も的確に表すことばとしてそれを「灰色の領域」と呼んだのである。そして、生存後も、救済されるべき被害者が、ラーゲルにおいて加害者であった記憶のみを持ち続けてしまうことの暴力性を、プリーモ・レーヴィは厳しく非難した。この「灰色の領域」は、被害者にとり「秘密」の領域ということになる。これは、秘密にしておきたいという意味では決してない。むしろ、「ホロコースト」に対する人びとの「凡庸な理解」の産み出す社会知に対する抵抗の手段として考える方が妥当である。ここでの「凡庸な理解」とは、被害者を常に「弱者」として位置づけることや、ホロコーストのコアの部分を理解する際に持ち出される「被害者 vs. 加害者」という二項対立を産み出すものである。

この凡庸な理解は、「ホロコースト」という歴史事件の理解をしばしば妨げる。そして、この記憶にとり大切な「灰色の領域」を忘却するのである。なぜなら、「ホロコースト」を前にリベラルな記憶観を紡ぎあげるアメリカ社会は、被害者を永遠に「被害者」として想起し、その「秘密」を暴くことでこの事件を知り尽くしたような錯覚を生み出し、それ故に被害者を救出する「正義のアメリカ人」像を作り出し、「被害者」を見つけては大義名分を創り上げ軍事介入するという「正戦論」を正当化してゆくのである¹¹⁾。凡庸な理解の産み出す社会知は、「ホロコースト」の記憶にとり暴力以外の何ものでもないのである。

この記憶の暴力に抵抗するために、生存者は常に「秘密」を保持することに固執する。凡庸な理解の産み出す社会知生産に、異議申し立てをするために声を挙げる場所をまず確保し、この場所において彼ら・彼女らは真の「証言者」となろうとするのである。この「秘密」を確保することのできない記憶生産は、証言者の話す場所を奪い、記憶の死を意味することになる。また、この場所は、証言者だけでなく死者の声を聞くための場所でもある。なぜなら、証言者は死者のために証言するから¹²⁾。死者の姿をみた最後の証言者は、直接手を下した加害者と、彼らを見送った証言者なのである。この場所は、彼ら・彼女らのための場所ではなくてはならない。これが、ホロコーストの記憶における、この場所が喚起する「他者性」とリンクする。

ここでの「他者性」は、存在論的なものでは決してない。ホロコースト表象に関する多くの考察が、この他者性を存在論に変換しているのは興味深いことである¹³⁾。もちろん、存在論的な他者性は、最終的に死者、そして死者の目撃者としての証人の声にたどり着くための戦略的な概念ではある。しかし、もし存在論にこの「他者性」を帰してしまうならば、すでに存在しない死者

の声を聞こうと試みる社会实践は、オカルト的な神秘主義の域を出ないことになってしまう。その結果、レーガンの発言に見られるような、この大切な領域を示す言葉、つまり「秘密」を否定してしまう帰結までもたらずのである。しかも、それは説得力を持つからやっかいである。したがって、ここでの「他者性」とは、実際に存在する他者であるとか、(すでにこの世にいない)死者を、そのまま指し示す言葉ではないことに注意すべきである。

存在論以外の「他者性」には、三重の意味がある。第一に、「ホロコースト」を理解しようとする「私たち」の知識にとっての「他者性」である。「私たち」が、ホロコーストを理解しようとしても、それは常に不知の部分　つまり「秘密」　を含むということであり、この「秘密」の部分「私たち」にとっての「他者性」として位置づけようとする試みである。これが、凡庸なホロコースト理解に対する抵抗手段であることは、先に述べたとおりである。第二に、「私たち」の凡庸な理解の中にある「秘密」の中から、死者、そして使者の証言者の声を聞くことの可能性を、追求することを示している。ここには、存在論としての他者の含みがあるが、あくまでも他者の声を顕在化する場のことを指すのであって、存在としての他者ではない。このような場で、他者の声を聞くことの可能性を「他者性」と位置付けるのである。また、第三に、ここでの「他者性」とは、自分でもない、他人でもない、そして、実はその両方であり、したがって、どちらにも完全に属さない境界線領域のことを指している。これは、「私たち」にとっての「灰色の領域」ということになる。この「灰色の領域」は、ホロコーストの記憶に向き合う「私たち」が、自らの帰属意識を硬直化させることに異議申し立てをすることを可能にさせるものである。記憶を前に、自分自身が誰であるのか決定することが求められているのではなく、むしろ自分でもない、他者でもない、という常に可能性が将来に向かって開かれているような境界線上の自我を形成することが求められているのである。これは、自己存在の偶有性を要求するという点で極めて洗練された、記憶を前にした「私たち」に求められている実践である¹⁴⁾。プリーモ・レーヴィの「灰色の領域」は、証言者のための場所であるが、ここでの「灰色の領域」は「私たち」が保持しなくてはならない領域である。しかも、この領域は、結果的には証言者や死者のためのものになる。なぜなら、私たちが偶有性を保持することで、死者は「私たち」の自我形成の中で声を挙げるのが可能になるからである。ここでは、寛容さを要求する「多様性」という理想を考えることによりアメリカ人像を創り上げる社会、これを産みだす博物館に異議申し立てをすることが可能になるのである。また、ユダヤ人を解放した「正義の使者」という「アメリカ人」像形成も、ユダヤ人との連帯意識を持つことで被害者意識を持つとする「日本人」像形成も、この領域の存在を顕在化することで、「ホロコーストの記憶」の持つ「他者性」に射抜かれるのである。この領域の中では、本質的で永続的な生命を持つ人間は、必ず「死ぬ」のである¹⁵⁾。この領域を守り「死者」となることが、「私たち」に求められている記憶実践なのである¹⁶⁾。

3．メトロポリスからネクロポリスへ

その一方で、記憶の「秘密」を守ることはたやすいことではない。この博物館のあるモール地区は、ワシントン DC というメトロポリスに位置するために、感情的な多くの声を集める。実際、ここで紹介したホロコーストの定義をめぐる事件でも、多くの民族団体からクレームが寄せられ、ジャーナリズムや一般市民をも巻き込む論争になっていった。このメトロポリスは、言説産出を促す場所なのである。これは、単に地理的に、ワシントン DC がアメリカ合衆国の首都であるこ

とを意味するものではない。広義に捉えるならば、熱烈な言説産出を促し、この言説産出を通じて一種の世界観まで産みだすワシントン DC は、カルチュラル・キャピトルなのである。ここでの世界観とは、最初に触れた、アメリカ社会を規定する「多様性」という言葉により示されるものであり、それが約束するであろう「多文化主義・リベラル社会」というものである。メトロポリスに、多くの言説が向けられ、定義に関して論争が起こった時、その論争の解決策として「多様性」「多文化主義」という言葉が、産出されたことは注目に値する。

近代帝国主義時代、メトロポリスと周辺都市との関係は不均衡なものであった。帝国主義時代のメトロポリスとは植民地宗主国の都市を示す言葉であり、植民地化された地域にとっては、「あこがれ」の場所であった。辺境化された地域の住民は、メトロポリスに向かって夢を語り、上京して安価な労働力を提供し、自分の住んでいる地域を恥ずかしく思い、自分の言葉を恥じて矯正し、自分の出身地がメトロポリスのような都市になることを夢見るのである。ここでのメトロポリスと辺境に置かれた地域との関係は、圧倒的に不均衡であった。同様に、ここでのホロコーストの定義に関する論争においても、中心と辺境との関係は不均衡である。なぜなら、この論争において証言者であるアルメニア人団体が声を挙げたことで、彼らが受け取った言説は、「被害者同士が被害の規模を競うことは醜い」とか「多様性を図るために、多くの被害者が定義の中で寛容の精神を発揮することはよいことだ」というものであった。虐殺という歴史事件が博物館により展示されることで、自分たちの犠牲が世間から認めてもらうことの可能性がメトロポリスにあるために、彼らはメトロポリスに向かい声を挙げざるを得ない。これが、ワシントン DC がカルチュラル・キャピトルである所以である。メトロポリスは、現代においても多大な力を持っているのである。その一方で、彼らの声は、メトロポリス、ワシントン DC (つまり、アメリカ) により、再解釈されることを余儀なくされるのである。「被害の規模を主張するのは醜いので、寛容な多文化社会を築き多様性を大切にしましょう。ホロコーストのような事件を未然に防止する策は、アメリカ社会の理想である多文化主義であり多様なのですよ」と。その結果、彼らの証言は、アメリカ社会の理想を照らし出すためだけの声に、還元されてしまうのである。

ここでは、「他者性」が忘却されている。そして、アメリカ社会にとっての「灰色の領域」も忘却されている。ホロコーストを未然に防止することのできる社会構築が大切であるとしても、どのようにこの記憶を大切にしていくのかという「how」をもっと熟考するべきであると思う。都市は、単なる地理的なものとして考えるだけではなく、カルチュラル・キャピトルとしてのメトロポリスとして位置づける必要がある。古いタイプの帝国主義や植民地主義は終焉を迎えたかもしれないが、新しいタイプのものは、言説産出の方法を管理し、辺境化された人びとの声を利用し奪い続けることで自らの存在を維持してゆくのである。その一方で、人びとの声が存在しなくては、メトロポリスは自らを存続させることができない。むしろ、人びとの声を持つ「秘密」を戦略的に利用することで、記憶を紡ぎだしてゆく実践が大切なのである。ホロコーストの記憶に関して求められている実践は、間違いなく、証言者や死者の持つ「秘密」の中に鍵がある。メトロポリスにおいて、死者の声を響き渡らせる実践が必要であり、その死者の声により本質的な社会知・アイデンティティは死を迎えることになるのである。つまり、都市(メトロポリス)を死者の街(ネクロポリス)にしてゆくことが必要なのである。そして「秘密」をなくすことが博物館の情報発信という機能であるとするならば、この機能は再考する必要があるであろう。

「国際交流とコミュニケーション」というと、その参加者の存在とグループ間のイシュー自体を重要視する理論・実践が多い。しかし、私がここで主張したいことは、まとめれば以下の三点である。第一に、国際交流というコミュニケーションが起こる場所である、「都市」の果たす役割をメディアとして考慮に入れるべきである。都市は、圧倒的な力を持ち、交流を媒介していることは、ここでも示した通りである。第二に、都市の果たすメディア的役割を考慮することで、交流であるとかコミュニケーションの参加者の保持する偶有性を、コミュニケーション研究にとり大切なものとして考えるべきである。偶有性こそが、コミュニケーション研究が対象とする「他者」との交流に介在する不可欠なものである。そして、偶有性を顕在化する実践こそが、コミュニケーション実践なのである。第三に、記憶の場において、死者の声を、積極的に思考する方法論の確立も求められている、ということである。独島・竹島問題、中国における反日感情の噴出など、国際交流の可能性に溢れている場所で、「私たち」は、もっと死者の声を挿入してもよいのではないか。「交流(コミュニケーション)」という実践は、その場をネクロポリスにすることである。

註

- 1) この論争の様子は、ニューヨークタイムズなどの新聞を始めとするジャーナリズムによって取り上げられた。また、以下の文献には詳細が記されている。Linenthal, Edward T. *Preserving Memory*. New York: Penguin, 1995.
- 2) この定義は、以下のパンフレットに記されている。The President Commission of the Holocaust. *Report to the President*. September 27, 1979.
- 3) この様子は、ここでは詳細しない。興味のある方は、註1で紹介した Linenthal の著書を参照されたい。
- 4) 最終的に、アルメニア人虐殺は、博物館の中で一箇所スペースを獲得した。しかし、そこでの展示内容は、アルメニア人虐殺が中心ではなく、あくまでもユダヤ人ホロコーストのためのものであった。ヒトラーが、「誰がアルメニア人を覚えているのか」と言ったことに言及している展示があるだけで、具体的な被害状況などは説明がない。
- 5) Gourevitch, P. "What they saw at the Holocaust Museum." *The New York Times Magazine*. February 12 (1995): p. 45.
- 6) Miller, Judith. *One, by One, by One: Facing the Holocaust*. New York: Simon and Schuster, 1990.
- 7) Young, James E. *The Texture of Memory: Holocaust Memorials and Meaning*. New Haven, CT: Yale University Press, 1993, p. 347.
- 8) ヴィーゼルは、大統領への報告書の中で、彼の著作である『夜』の意味する、神が死んだ状態の不可思議さを示すユダヤ神秘主義の独特の言い回しで、ホロコーストの「神秘」性を論じた。The President Commission of the Holocaust. *Report to the President*. September 27, 1979, pp.4-5.
- 9) 情報発信型の機能を持つ博物館は、理想であると認識されている。「新しい博物館学」を志向する啓蒙書においても、この機能は前提とされている。例えば、以下を参照。水藤真『博物館を考える：新しい博物館学の模索』山川出版社、1998年。
- 10) この「灰色の領域」テーゼを最も有名にした彼の著作は、『溺れるものと救われるもの』(竹山博英訳)朝日新聞社、2000年、である。また、富山一郎は、沖縄戦の記憶という文脈で、このテーゼを実践した。『戦場の記憶』日本経済評論社、1995年。
- 11) アメリカの正戦論に関するものは、以下を参照。藤原帰一『戦争を記憶する：広島・ホロコーストと現在』講談社現代新書、2000年。
- 12) ドキュメンタリー映画『SHOAH』の監督ランズマンは、1995年に来日した際、NHKBSの番組でのインタビューに応じた。その際、彼は、証言者は死者を目撃した最後の人間であり、彼らのために話すことのできる最後の証言者であり、「亡霊である」と言った。これは、前述したプリーモ・レーヴィの著作などにも、しばしば言及されるものであるが、生存者の解消することの不可能な死者への「負債」を示すものである。死者が彼らの証言を反復させている、とでも言ったらよいだろうか。
- 13) 多くのホロコースト表象研究が、レヴィナスを援用し他者性を存在論に変換している。他者性を存在論に還元することは、プリーモ・レーヴィの説く「灰色の領域」を忘却するのではないだろうか。なぜなら、本文にも記したが、被害者を「そういうもの」として位置付ける時、彼ら・彼女らに向かう合う人びとは、「救済者」という属性を手に入れることになるからである。存在論は、存在を条件付ける agency を考慮することの

可能性を著しく狭める帰結を招くことが多い。

- 14) 偶有性とは、古典ギリシャレトリックにおける重要な概念である。これは運を意味することばであるが、幸運だけを示すのではなく、どちらかという、結果が出る前の、どちらにでも転ぶ状態のことを示すことばである。この拙論の文脈では、自分が誰にでもなることができるような、自身の可能性の選択肢が将来に向かって開かれている状態のことを指し示す。
- 15) 以下の拙論に「死」を戦略的に使うことの可能性を示した。「国立墓地・碑から「死」について考える：ある「命令」とメメント・モリ」『グローバリゼーション・スタディーズ(入門編)』(藤巻光浩&戸田三三冬編著)創成社、2005年、p. 206-225.
- 16) 註12で紹介したランズマンのインタビューの中で、「この映画を観て日本人のみなさんも、どうぞ一緒に死んでください」という部分があった。彼の不可思議なこのメッセージは、まさしく「私たち」が「死者」となる実践のことを指しているのではないかと思う。

引用文献

- The President Commission of the Holocaust. (1979). *Report to the president*. September 27.
- Gourevitch, P. (1995). What they saw at the Holocaust Museum. *The New York times magazine*. February 12 (pp. 44-45).
- Young, J. E. (1993). *The texture of memory: Holocaust memorials and meaning*. New Haven, CT: Yale University Press.